

3 寄稿文

(1) 東日本大震災と停電対策



株式会社ナベル
代表取締役社長 永井 規夫

2011年3月11日、リーマンショックから漸く動きを取り戻しつつあった日本経済に過去に経験の無い巨大地震が発生した。千葉、三重、山口の弊社の拠点は、千葉の流山事務所の壁が若干落ちた以外は幸い大きな被害は無かった。丁度東京で開催されていた見本市に参加していた営業を中心としたメンバーは、帰宅難民になりそれぞれが大変な思いをして、帰途に付いた。少し、落ち着き関係者の安否を確認出来ほっとした時、宮城県白石市在住の友人の安否が気に成りだした。何度か電話をするも通じない。安否確認の電話が殺到していたに違いない。翌日、何度目かの連絡で漸く通じた時、食料品かお菓子でもお送りしようかとの私の申し出に、「水や食料は何とかなっているが、乾電池が欲しい。こちらでは、品不足で、ラジオを聴くことも出来ない。携帯電話の充電にも皆困っている。そちらで買い集めて送って欲しい。」との事であった。早速、買い集めて段ボールケースに一箱お送りした。その時に、閃いた。私は、三重県に本社がある株式会社ナベルという蛇腹を製造販売しているメーカーの代表だ。1972年カメラ用蛇腹を皮切りに、医療機器のテーブルカバーや、精密機器、工作機械、マテリアルハンドリングの安全用カバー、半導体製造装置、レーザー加工機の光路カバーなどを市場に提案してきた。後発のメーカーであるがゆえに、顧客や市場の困っている状況をうかがって、今までにない製品の提案を心がけてきた。平成25年には、知財功労賞を特許庁長官から頂いている。リーマンショックの折には、我々も売上げが激減し、大きなダメージを受けた。そこで考えたのが、今までに取り組んでいなかった分野でのポートフォリオの組み立てだった。その内の一つである再生可能エネルギーと蛇腹の関係がどうしても結びつかなかったのだ。しかし、閃いた。蛇腹の特性を考えると、表面積を増やすという内在的な性質がある。それを折りたためば、収納性が増した、携帯性が生まれる。日本で初めて輸出された工芸品の扇子も蛇腹である。雨傘なども同じだ。災害の翌日でも太陽は昇る。この太陽光エネルギーをジャバラで大きく広げた状態で受けて発電できれば、何処にでも運べる機器が出来るはずだと。当時、買電システムを政府が推奨して、買い取り価格を設定し始めていた。20年間遊休地をソーラーパネルで占有すれば、儲かると。しかし、私は、むしろ自分で使用する電気を自分で発電する仕組みを普及させる方が、有効だと考えた。当初は、70kgにもなる自立し伸縮する壁にPVを貼り付けた構想で製品化したが発売できなかった。そこで、軽くて柔軟性のあるアモルファスシリコンを入手して、折りたためてリックサックに入り何処にでも運べる構造に改良した。重量は3kgに減った。電池の開発を三重大学と共働で進め、UNIDOでの登録や防災活動や企業のBCP活動を中心に営業してきた。最近では、米空軍からの試験用内示まで頂くようになった。今後は、わが国で多発する集中豪雨や台風などの災害に対し、各家庭で、普段はレジャーなどの補助電源として、そしていざという時の非常電源として活用していただけるラインナップを整え、社会的な貢献をしていきたいと考えている。